

名誉館長館話実施報告抄

新野直吉*

小畑 勇二郎・赤星 藍城・高岡 専太郎・小西 正太郎・湯澤 幸吉郎・小田島 樹人

はじめに

平成21年度は、「先覚記念室」「菅江真澄資料センター」に関係する館話を12回行った。例によってその中から、先覚についての5月8日(金)小畑勇二郎・5月22日(金)赤星藍城・6月5日(金)高岡専太郎・6月19日(金)小西正太郎・7月3日(金)湯澤幸吉郎・7月17日(金)小田島樹人の6回分を文章化して報告する。

小畑 勇二郎

明治39年(1906)9月15日北秋田郡早口村の弥五郎沢10番地に、父勇吉母シカの次男として誕生。家業は雑貨商であった。祖父までは同郡二井田村に居住していた。大正2年(1913)4月に早口尋常高等小学校に入学する。大正5年父は北海道の炭鉱に赴いた。家計が苦しくなったのであろう。家は他人の手に渡ってしまう。頼みの父は翌6年に現地北海道で死去する。

8年3月尋常科を卒業し、地元の有力者吉田季吉に支えられその養子分となる。本人は近い大館中学校を考えていたというが、吉田は彼を秋田中学校に入学させた。成績優秀な寄宿舎生であったが、上級に進むにつれて青春を巷で発散させる行動派にもなったという。要するに単なる堅物ではなかったのである。13年に卒業するが、弘前高等学校の受験もしたものの、体調などのことがあって合格はしなかった。

14年(1925)4月早口小学校の臨時雇(代用教員)となったが、翌15年3月樺太に出奔した。中川重春も明治44年に樺太に赴き樺太庁嘱託となったのであるから、ロシアに近い樺太に近代青年は何か感ずるものがあったのかもしれない。小畑の場合は短期間で戻り、6月には扇田小学校の代用教員に、10月には山田小学校の代用教員になる。

早口で5年生の1年間習った五十嵐貞一は若くてきびしい先生で、唱歌と書き方は別先生、体育の時間は野球ばかりだったと追憶している。

昭和2年(1927)3月短期現役入営の訓導の代用教員として5ヵ月間早口小学校の臨時雇になり、10月には早口村書記に就職する。役人の出発点である。5年戸主だった祖父が亡くなり、自分が戸主になる。戸籍上の家族の長になったのである。

6月松尾好子と結婚し、妻は鷹巣実科女学校の教員となる。7年長男伸一誕生、8年次男次郎誕生、母親としてのことを考慮したのであろう早口青年学校に転勤する。9年には秋田県書記になって県政に携わる職分になり、北秋田財務出張所勤務となる。10年には三男立三、13年には四男士郎が誕生し、14年には県庁の総務部庶務課勤務となり、秋田市に移り上内城町に居住した。

昭和15年(1940)春手形上丁に移り、更に秋には楢山に移住し、16年には五男悟が誕生する。17年税務係長になり、20年(1945)3月知事官房企画室幹事に就任。六男駿六が誕生楢山南新町に転住。8月同企画室文書課長兼務。21年内政部庶務課長、23年4月総務部次長陞進。24年1月長女千鶴子誕生、2月民生部長、翌25年8月総務部長を兼務し、第一回公選知事蓮池公咲麾下最高県官となった。

昭和26年(1951)3月この頭職を辞任する。働き盛りの辞職は4月30日施行の知事選挙出馬の為である。しかし選挙の結果当選したのは29万3623票を得た土木部長だった池田徳治であった。なお小畑は25万6148票で、3万7400余票の差であった。しかし社会はこの秀れた吏員を休ませることはなかった。6月に、この年4月秋田市長に当選の武埜三山市長に請われて秋田市第一助役に就任する。

種々行政手腕を発揮したが、28年4月には「千

* 秋田県立博物館

秋公園」が県から市に移管されるということや、秋田市茨島に秋田短期大学が、秋田出身（秋田師範中退）の古田重二良日本大学理事長と県・市の協力で設立されるようなことがあった。8月「県都三百五十年祭」が行われ、29年7月山王体育館の開館があり、10月には周辺12町村（翌年正月更に1村）の秋田市合併も行われた。

30年(1955) 4月30日秋田県知事選挙において41万6245票を獲得、7万7663票の古沢・6万9982票の鈴木両候補に大差をつけて当選3代目公選知事に就任する。7月には県の大機構改革を断行し、農政でも稲作の「三早栽培」を励行する。しかし時勢の赴くところ31年4月秋田県は赤字再建団体に指定され、32年8月には県庁焼失という大災難に見舞われた。だが知事の推進していた「八郎潟干拓」という世紀の大事業は、33年8月起工式を行う。

34年4月30日の知事選挙は、53万1817票で三浦候補の7万4349票に大差をつけて当選し知事2期目となる。11月3日県旗・県章を制定し、12月7日県庁舎落成し山王に移転した。35年3月社教主事の規則を定める。社会教育先進県として必然のことであった。4月には八郎潟干拓の「鍬入」を行い、5月には北米・南米・欧州の視察に出発する。

36年(1961) 3月に、松橋藤吉が副知事となる。4月八橋青年の家開設。9月には秋田空港が開港され、県児童会館も開館された。そして10月待ちに待った国家的行事の第16回国民体育大会が秋田県で開催。空の旅は勿論であるが、国鉄の特急列車などもそれに合わせるように運転を開始し秋田駅も改築された。

11月6日既に完工していた県民会館の落成式が行われ、知事は「秋田国体成功のあと生まれたこの会館は、国体を永久に記念するもので県民文化の殿堂」と意義づけ、大いに活用すべしと式辞で述べた。

そういえば「年頭のあいさつ」（「秋田警察」36年1月号）でも県政の第一課題は所得の増加と生活水準の向上で、第二課題は国体受入れ態勢の準備であると述べていて、国民の祭典を秋田なりに県の力を発揮し成果をあげたいと力説していた。

そして結びに「親しまれる県庁・信頼される県政」をモットーとすると述べている。県民会館と共に県立図書館も記念館跡に完成した。

前年沖縄で「千秋の塔」が建てられていたが、38年(1963) 4月に54万票を得て三選。相手の三浦候補は8万であった。5月には第一回社会教育振興大会を開催し、8月にはインドネシアからイタリアの視察に赴く。40年7月にもソ連から北欧の視察に外遊する。この年8月には『秋田県史』16巻が完成した。そして11月には新産業都市指定があった。秋田湾沿岸地帯が対象であったが、殆ど期待は実を結ばなかった。

この頃秋田高校長に在任した鈴木健次郎は「汝なんのためにそこにありや」の警句で生徒を奮起させたが、秋田中学同期の知事の信任が38年の母校着任になったのであろう。41年3月退職という短期間ではあったが、本来青年団活動から始まった社会教育の練達者は、高校長から秋田県新生活協議会副会長兼事務局長・県青年会館理事長に移ることで十分に存在感を県政上に示した。

そういえば鈴木の前任者村岡校長も山本郡の村長から就任し大学教授に転じた練達の人士であった。知事の意向が就任の背景にあったのであろう。

42年(1967) 2月県産リンゴがソ連に初輸出され注目された。4月には52万票で四選、相手の小川候補は9万票であった。5月田沢湖に《たつ子像》が建った。その田沢湖畔で翌43年5月全国植樹祭がとり行われる。そしてこの43年10月には県立体育館が完成した。秋田でもこの頃は学生運動騒然だった。

44年(1969) 8月25日天皇皇后両陛下の行幸行啓があった。8月2日から9月25日までの秋田農業博覧会並びに県下御視察のためである。昭和45年5月15日には知事の画策の大成功である秋大医学部初入学式が行われる。

昭和20年4月開校した秋田県立女子医専が、21年5月秋田医専と改称22年男女共学を目指したのに、22年4月校舎焼失し同年11月に廃校になっていた。小畑知事は秋田大学に医学部を置く計画を推進した。

能代出身の敏腕女中のいる赤坂長谷川などで、

好きな釣りに男鹿に招かれたという稲葉修などを初め有力政治家と接触し目的の達成に協力を求めたと伝えられる。坂田道太・荒木満寿夫・高見三郎などの有力者から、参議院議長の重宗雄三や自民党幹事長の田中角栄などにまで至ったという。

県出身の山崎五郎参議院議員の情報連絡も有効な味方だったという。昭和44年1月に政府予算として495万円の調査費がついたのである。実は大学では別な学部増設は計っていたが医学部は考えておらず、文部省の方も戦後医学部の設立具体策は立案していない時代なので、県独自先行的な医学部設置は、望みは達したものの、秋田の刺戟で国の計画成立以後に置かれた国立大学医学部に較べて、経営上多くの苦難点も存在した。だが小畑知事以下の政治行政力は広く示されたと考えられる。7月にブラジル秋田県人会十周年の式典に出席する知事の心は軽かったことであろう。

46年1月16日、秋田県青年の家・青年会館が完成し合同落成式が挙行された。2月第26回国体冬季大会スキー競技会が田沢湖高原で開催された。3月30日51万票で五選、対する小川候補は13万票。この年農林省発表の減反量は秋田県46万8000屯であった。知事は県下各地に趣旨説明の事務方と同行したという。

県南大森町では知事の挨拶に聴衆の中から詰問的発言があった際、再びマイクの前に立った知事は、「来賓なのにこのような不躰に出会うのは初めてだ」と受け、場内に笑いが起こって、続く事務方の説明がスムーズに進んだという話を聞いた。減反は水稲単作的地帯では難事であるから各地で色々なことが起こった訳であろう。7月知事は訪ソし、8月には立県百年記念式が行われる。

47年(1972) 4月県生涯学習推進本部が発足し、8月に訪ソ青年の船の団長を知事自ら務める。11月には生涯学習推進集会を開催する。48年4月県立農業短期大学が開学し、知事は秋田経済大学理事長に就任し、8月第2回訪ソ青年の船でも団長となり、10月には訪韓する。49年8月第3回訪ソ青年の船団長の任に就いた後、10月六選出馬を表明する。

昭和50年(1975) 4月30日43万票を獲得六選。

鈴木候補29万・田島候補3000。5月5日当県立博物館が開館する。6月松橋副知事が名補佐役の業績を残して退職した。何か時代の変化を感じさせる。8月に知事は第4回訪ソ青年の船団長を務める。

51年1月佐々木喜久治副知事が就任。5月減反に対極の位置を占める米消費拡大推進協議会発足した。翌月の6月第1回生涯教育推進協議会を開催。7月知事は第5回訪ソ青年の船団長となる。8月全国知事会副会長就任。11月第1回日中友好農業青年の翼団長をも務める。国連運動の努力に対し外相表彰を受けた。

ところで中国に旅し帰ると知事は「ソ連は一度見るべき国、中国はこれから学ぶべき国」と位置づけ、長く続けたソ連関心を中国憧憬の方向に志向を変えたごとくである。中国は『論語』の国であるという教養も作用していたのであろう。毛沢東中国における水稲密植農法さえ評価していたと聞いた記憶がある。当時流行の「大寨に学べ」主唱者の一人ともいえる。

52年(1977) 4月県の地方部が設けられ、同月末ブラジル・アルゼンチンなど南米の訪問をする。7月には第2回日中友好農業青年の翼団長も務める。53年5月には県立営農大学校を開いた。同月尾去沢鉱山が閉山されたが、一方県地熱開発利用センターが完成するという時代の移り変りを示す動きもあった。9月には第3回日中友好農業青年の翼団長となり、完成近い「水心苑」に皇太子同妃両殿下の行啓があった。

54年(1979) 1月第34回国体スケート競技会が開かれた。この年4月の選挙で佐々木喜久治知事が当選し、25日田治六郎博士の造園力を支えとした県立小泉湯公園水心苑が開園し、29日6期24年の秋田県政指導を終え小畑勇二郎知事は退任した。

5月7日秋田経済大学常勤理事長として初出勤する。6月田代町名誉町民となり、10月秋田市將軍野に新居を営み居住。11月には秋の叙勲で勲一等瑞宝章を授けられる。首長として最高栄光である。この間退任直後5月30日岩城町の前川町長を退任挨拶で訪れる。眼鏡をとりそっと涙を拭った前知事の間人性描写が前川氏の著述に載っている。

55年(1980) 4月生涯教育センターが1日に開

所し、9月甘肅省招待友好視察団長として渡中する。10月生涯教育十周年記念集會も開かれた。何れも小畑県政の重視事項である。56年6月雄和に秋田空港が新しく開かれたのも知事として進められたものの成果である。

8月29日に「秋田県名誉県民」の称号を受けたのも、3月にその条例が公布されたうえ直後に小畑前知事が選定されたのも、県民意向の結実である。10月経済大学下北手校地の造成工事が始まり、後の「経法大」への展望を実現化する第一歩が踏み出された。

昭和57年(1982)4月附属高等学校中国研修旅行団長を自ら務める積極性を示す。附属高校も理事長の方針のもと奮起していたことがわかる。前年には全国高校駅伝で3位の好成績を挙げている。且つこの57年8月には秋田県と甘肅省、秋田市と蘭州市の友好提携の調印が行われたが、これも小畑県政以来の日中友好方向の一具現であった。

57年8月中国からの使節団14名が成田空港に着いた。真先に空港に出迎えた前知事に精気がなかったと長男伸一氏が手記に述べられるし、5日のこの調印式でも悲愴感があったというのが、29日の「県の記念日」は欠席する。

十数日後「秋田県壮年の翼訪中団」団長の役目を控えていたからでもあろうか、9月1日秋田赤十字病院で精密検査を受け、5日中国行にドクター・ストップがかかった。

そして赤十字病院に入院、9月18日結腸ガンの手術に成功したが、10月4日余病併発秋田大学病院に移り、翌5日午後数え年77で逝去した。従三位に叙され10月23日経済大学葬、26日田代町民葬。11月3日秋田市文化功績章が贈られ、5日県民葬があった。昭和58年6月20日小畑勇二郎顕彰会の銅像除幕式が行われた。

赤星 藍城

安政4年(1857)3月24日(戸籍は2月16日)陸奥国伊具郡角田本郷早川武市・イト次男啓次郎誕生。士分ながら実質百姓生活であった。勿論武士の子として学問はきちんと修めたので、慶応3年(1867)仙台で丹野樊山に書を学んだ。樊は木

の圃の意であり山めぐる地形を意識したものかと考えられるが、漢の高祖が沛公時代にその生命の危を救い、漢の武将として名高い樊噲を敬慕しての号なら、この書の師の思想の影響を彼も受けた可能性があるだろう。

青葉城に因む青城とか葉城・碧城とかと号していた啓次郎は長じて「藍城」を称するに至った。青から出でて青より青い藍の「出藍之譽」を身に体することを期したのであろう。

明治維新後は、獄卒(看守)・邏卒(巡查)・県吏などを啓次郎は職としたが、明治11年(1878)宮城医学校県費生となった。ここでその素質を認められ校長赤星研造の一族宮城郡七ヶ浜村赤星仙太の養子になる。実態は研造の養子であった。明治時代の前期には各県に医学校が置かれた。

秋田にも甲種秋田医学校があった。大正9年(1920)軍医監(後年の軍医の将官)になり、14年(1925)軍医総監(後の軍医中将)に陞った中村緑野は、この学校を明治20年に卒業した秋田人である。

宮城医学校を卒業してから養父の意図であろう東京大学医科別科に入り修学、明治19年12月に卒業する。直ちに九州久留米の整理堂病院の副院長に赴任する。ところが翌20年5月10日秋田県仙北郡大曲村に開業することになる。或いは九州が離れ過ぎだったものかとも思われるが、どうもそうではなく、仙台時代の友人伊藤直純・沼田宇源太・川村寅之助など秋田人から誘われたものだという。

沼田は横手出身で県会議員から発憤東京法学院(後の中央大学)に学び、弁護士として大隈・鳩山など政界有力者とも関係を持ち、明治29年の第4回総選挙で平鹿郡から初めての代議士に当選する人物である。川村は、金沢出身の県議、そして赤星は、一番親しい伊藤とは東京での勉学中も大沼枕山の漢詩塾でも一緒になる縁の深さであった。伊藤は明治10年上京根本通明塾で学んでいる。

伊藤は仙北郡金沢中野村の豪農の長男で、14年明治天皇御巡幸の歓迎について帰郷した後明治法律学校(後の明治大学)に学び16年犬養木堂を秋田日報社に招くことに尽力し、20年6月仙北郡か

ら県会議員に当選した。

このような状況下伊藤は招いた赤星と共に仙台から黒沢尻行郵便馬車に乗った。ところが山中にかかると馬丁らが強盗に変身し、「大切な荷物を奪われる」(『秋田の先覚』3)という「戦慄の一夜」を体験しての秋田県入りであったという。

伊藤は後三年ノ役の史跡顕彰や史料収集にも努力し、金沢公園の造成や「後三年駅」の名付け親の任も果たしたが、明治31年8月施行の第6回総選挙に、押されて立候補当選している。こうした仙北の知己に迎えられての大曲開業で、12月には仙北・大曲医師会長に選出されている。

この様な経緯を見れば長く県南にとどまりそうに思えるが、23年(1890)1月北秋田郡米内沢公立病院長に就任するのである。そして阿仁私立衛生会も立ち上げその会長にもなる。そして顔真卿など中国の書風研磨に励んだ。南画も能くしたが、25年にはこのころ流行の六朝風の書も研究するようになる。

26年(1893)8月秋田市大町4丁目に赤星医院を開業することになる。後に土手長町末丁21番地に移転して充実する。洋風の院舎でその門には自筆の名看板を掲げ、32年六朝書道の名書家日下部鳴鶴と出会い、その運動に共鳴し、篆書・隸書・楷書・行書・草書の各書体に天賦の才を発揮した。専門家の間では鄭道昭の摩崖風書風が高く評価されている。

33年(1900)2月21日松山君南「臨地品膳」に「医を業として傍ら書と詩とを嗜む。その書隠逸流麗、俗間を蟬脱し、その筆の練軽なる、優に古法を窺ふ。」(秋田魁新報)と評された。鳴鶴に専門書家として上京を進められた程で、単なる六朝風だけではなく殷・周から明・清に及ぶ中国書風の研究体得は鳴鶴を遙かに越えたといわれるが、あくまでも「本業は医師、書は趣味」の立場を守っていたという。文人国手(国手は医師の意)の面目躍如である。

37年養父研造の死があり、2月(11月とも)宮城の赤星家から独立して本籍を秋田に移し永住することになる。医院の奥には「十声楼」という書齋があった。

後年の資料によると、「松・雨竹・桔槔(撥釣瓶)・絃歌・読書・柔櫓・躍鯉・倉庚(鶯)・鶯群・板橋」の十の音声に依る。やはり医・書の他に詩人でもあったのである。文人国手と称されたのもよく分かる。

39年10月由利郡下郷村老方の泉秀寺に建立の『明治三十七八年戦捷記念碑』の碑文を揮毫する。この年県会議員井上廣居と、その肺炎治療が契機となり親交の関係が生じた。彼の書道は「秋田の赤星藍城、岐阜の大野百錬、高知の川合横雲」が地方の三筆であると称された存在で、全日本でも広く認められていたのである。

41年(1908)10月、あくまでも医師である彼は秋田市医師会長に就任する。大正3年(1914)4月まで在任したので、5年半職務を達成したことになる。この大正3年に藍城が比田井天来に書翰を出し交流が始まり、やがてこの年に天来は山形・鶴岡から秋田に来遊した。天来こそ赤星を地方の三筆と位置づけた著名書家なのである。

大正6年(1917)5月に日下部鳴鶴を中心に「大同書会」が設立され、「書勢」誌の発刊が決まったが、後に同書会の評議員近藤雲竹から藍城に評議員就任を求める書簡が出された。中央書道界における藍城評価の高さがわかる。

日下部鳴鶴は11年(1922)1月に世を去るが、この年11月11日・12日に「第一回秋田県出身書画作品展覧会」(秋田美術倶楽部)が催され、それに「太平山の賦」を出品、翌年5月25日から27日の第二回の同展覧会・翌々年5月16日から18日の第三回の同展覧会にも出品は続けられた。また地元から請われ『明治天皇御賜名篋后阪碑』の撰文・揮毫をする。

13年には書道界で近代的書道団体として初めての存在たる「日本書道作振会」が結成される。前年9月の関東大震災に伴い、11月10日『国民精神作興ニ関スル詔書』が煥発されたことにより、中村不折・尾上柴舟・比田井天来などの著名書道人士らが動いたものであった。尚14年7月天来は作振会を離脱したということである。9月4日から6日までの第四回の県出身書画作品の展覧会に出品している。

大正15年(1926) 9月金沢八幡神社の改築社殿竣工の記念掲額を揮毫する。その地は当時は仙北郡金沢町である。この頃から古稀記念の『雲影水声帖』を書く。翌昭和2年(1927) 5月には親友たる伊藤直純編の古稀記念『十声楼寿詩 完』が刊行された。

11月由利郡平沢町仁賀保神社境内の安藤和風撰文の「斎藤恭太郎翁碑」の揮毫をする。12月には日本書道作振会の第三回展覧会(東京府美術館)に「草書七絶」「山水自画賛」を出品して賞牌を受けた。

昭和3年3月日本書道作振会第四回書画及篆刻展覧会の開催に当たり、評議員に推薦される。4月29日から5月6日まで「御大礼記念全県児童作品展」(秋田魁新報社主催)が東根小屋町の県立秋田図書館で開催され、藍城も秋田中学・秋田高女教諭らと審査員を務めた。5年には金沢公園に前年伊藤直純古稀記念に朝倉文夫作の伊藤像が建てられるに当たり、藍城が撰文し揮毫した。

昭和6年(1931)春、雄勝郡秋ノ宮村鷹ノ湯温泉の「酒国四時春」(紙本額装)を揮毫。3月30日には千秋公園・太平山・篤胤墓・八橋里・将軍野・金照山・迎輦坂・和泉邑・唐見殿・新屋邨・天徳寺・越王(古四王)宮・長生池原上水池・第四橋・発陳亭・競馬場・御貢川・土崎港・鬼傘巖・五輪邸・仁別溪を『秋田二十一景』画帖とし、序を記した。

且つ11月に営林署勤めの親しい文人豊間績堂が自分や友人が藍城の作品を輪郭で籠写した文字を集めた『績堂叢書七 藍城号』が刊行された。そして秋には秋田市表具師組合会の依頼による、秋田魁新報社改築竣工記念の『風偃草』の額字を揮毫した。名実共に秋田書道界の重鎮であることが窺われる。

ところが昭和7年(1932)になり春に脳溢血で臥床した。軽症だったというが、この後長く静養の時期を要することになる。70歳台半ばになっているので自重したのであろう。1月6日付秋田魁新報紙上作品図版が掲載され、またこの年増田小学校長の依頼を容れて大きな「敬愛」の額を揮毫した。8年1月3日無題の作品の写真が魁新報紙

上に載った。

この年には喜寿を形にした『十声楼寿詩』を著わし、一方では書の造形性や書風の近代感覚を合理的に研究学習しようという「書道研究斗南会」を、県醸造試験場長花岡青陽と結成した。北斗星以南第一を意識して藍城が会名をつけたという。会頭は彼で総務は花岡であった。

昭和9年8月上旬、2年前の4月「東方書道会」を設立し、8月書道講習会(愛国女学館会場)に来秋もしたことがある吉田苞竹が、此の年8月にも愛国女学館や五城目町永井旅館で講習会や講演を行ったが、この間秋田魁新報に4回連載の「書道趣味と上達法」なる寄稿があり、その中で藍城を「風塵の外に超越する」という名表現で称讃した。いわば「書仙」の趣があったのであろう。9月にはその書仙が題箋と扉を担当した秋田県図書館協会編『秋田郷土叢話』が刊行された。

11月には25日夜秋田魁新報社講堂での千秋書学会主催「全国に誇るべき秋田の書道」と題した比田井天来の講演会には藍城も参加し、講師によって称えられたうえ、28日は十声楼に天来の訪問を受け、秋田の書家達と歓談、天来は「斗南会」看板の揮毫に応じたという。12月には23日に前年の皇太子御誕生を祝す藍城揮毫の「神号標」が八橋の日吉八幡神社に建立された。

昭和10年(1935)4月27日から5月1日まで「第一回斗南会展」が県醸造試験場が会場で催された。4月29日には天来が見学に来秋、大町沼田旅館で審査にも当たった。そして5月6日から12日まで、同社主催の「第一回秋田書道展」が秋田魁新報社三階で開かれた。藍城と青陽が井上廣居相談役・安藤和風社長に働きかけ、天来と藍城とが審査に当たった。審査主査は天来であった。一般が148点、小学校514点の応募で292点が入選した。同社深浦宗寿計画部長兼政治部長が準備に当たり、会は連日盛況の裡に終る成功であった。

11年4月27日「第二回斗南会展」の準備、28日から5月2日まで「赤星会頭頌寿記念第二回斗南会展」が開かれ、第6室が会頭の記念室だった。3000人もの見学者で大成功であったという。7月1日「斗南会報」創刊。西宮藍堂「藍城先生十声

楼の由来」が収録されている。8月1日から5日まで斗南会の「第二回夏季書道講習会」が秋田県女子師範学校附属小学校で開かれた。この年12月26日には会の理解者安藤和風が世を去るという出来事があった。

12年(1937)4月28日から3月30日まで「第三回斗南会展」が開催され、10月中旬には「第三回秋田書道展」が開かれ、藍城ら所蔵の日下部鳴鶴作品も展示された。

10月初め肺炎になった藍城が、17日朝8時40分逝去した。行年81歳で、20日に手形大沢の白馬寺で葬儀が行われた。18日井上廣居「藍城先生を悼む」が秋田魁新報に載った。

13年6月15日から19日まで斗南書道会主催「赤星藍城先生遺墨展覧会」が魁新報社講堂で開かれ、139点が展示された。1月4日天来(66歳)が死去した昭和14年の2月に、斗南会編『藍城先生遺墨帖』が刊行されたが、その費用は膨大な負債となった。それを救ったのは木内百貨店木内トモ社長の寄付であった。

高岡 専太郎

明治18年(1885)2月18日雄勝郡横堀村白銀に父久治母スエの長男として誕生。24年横堀小学校に入学するが、校舎には小山田千代吉邸が充てられていた。やがて27年には西村半十郎邸が代って校舎となる。彼らの学年はそこで28年春まで学び小学校卒業を迎えた。

卒業すると南秋田郡土崎港町加賀町の外屋薬舗に奉公することになる。横堀から役内川上流に遡った川井村出身の大実業家菅礼治の世話があったらしく、その長男で明治16年11月生まれの礼之助に親しく兄事することになる。結果は終生その好影響を受けることになった。

31年(1898)土崎大火の被害もあり菅家は東京市麴町区に転住し礼之助も秋田中学から転じ商工中学5学年に編入ということになっていた。一方専太郎も38年(1905)の春に、奉公の年期が終了する。この年に開通した奥羽本線で上京し12月22日午前10時に上野駅に到着した。

神田区猿楽町に住居し、市電の運転手の仕事を

するが、上京目的であった勉学のためにはこの職務は不都合であった。

4ヵ月程で菅邸の書生となって時間を確保し薬学校入学を目指してドイツ語塾に通うのである。その結果39年7月11日に上野桜木町の東京薬学校に入学することができた。

経済力の乏しい彼には学費の苦勞があったが、郷里の親族の金沢忠兵衛・サワ(叔母)夫婦などの協力を得て、42年5月付で下山順一郎校長の時期に、「全試問優等卒業証書」を受領して卒業したのである。

しかし彼は決して薬学校だけで満足するような人物ではなかったのである。日本医学校を大正2年(1913)4月30日に卒業した。しかし卒業しただけで医師開業できないのはその後の制度と同じで、試験合格が必要であった。

山崎帝国堂などに薬剤師の立場で勤務して生計を樹てながら毎日5時間の受験勉強を展開した。3年10月「医術開業試験」合格、日本医学校外科塩田助教授が関係していた明治病院に勤務した。院長以下山形県人が多く殆ど東北人で組織のこの病院には内科・外科・産婦人科があり、当初10円程の手当の助手だったが、各科の實際を体得できたという。このことは帰郷開業を目指していた彼にとって極めて好都合な状況であった。

大正5年(1916)晩秋10年振りに横堀に帰郷した。父は59歳で既に2年前に亡くなっていたが、最大の目的は母の妹である金沢サワ叔母の見舞いであった。夫忠兵衛と共に学費について最大の支えをしてくれた叔母は、3年前には上京し湯島天神町の下宿まで訪ねて来てくれていた元気な叔母だったのに、5ヵ月前から病床に在ったのである。

叔母は嫁いだ金沢家で、3人の男子と7人の女子を生み育てたが、生家高岡家の没落を嘆じ専太郎が家運を建て直して呉れることを期待していた。そもそも高岡家は「大坂夏ノ陣」の落人だといわれており、叔母はじめ一族には誇り高いものがあつた。病気は肺結核であったから、通常は「避病院」に隔離されることになる。

金沢家は離れに向かうところに別に廊下を造りその先に「避病室」を設けていたという。押切宗

平著『高岡専太郎』は「専太郎は金沢の家に着くと真っ先にサワの病室へ入り、布団の横に座った。この日の様子は一部始終を目撃したサワの三女アツが、生前何人もの肉親に語っていることから知ることができる。『サワ叔母さん、専太郎です。新米の医者です。具合はどうか。』サワの頬はこけてしまい、布団から身を起こすのもやっとだったが、専太郎を見るなり表情がぱっと明るくなった。『専太郎、よく来てくれた。お前の顔を見ないでは死ねないと、毎日神仏に頼みっぱなしだった。やっぱり会えた。本当によかった!』専太郎はサワが最後の命を絞り出すように、自分に話しているのが痛いほど分かった。」と、サワの三女の日撃談を基に写實的に述べている。

対面の最終段階で、サワは家紋の付いた短刀を渡して、「専太郎、私が高岡から金沢に嫁ぐとき持参したこの懐剣を形見として持っていけ。何回も言うが大坂夏の陣で敗れた先祖が逃げて逃げて命をつないで、おまえがここにいる。自決用には使えな。ブラジルで自分の責務を全うしなさい。おめおめと帰るなんてことは許さない。これまで助けてくれた人の思いのたけをブラジルに持って行け、専太郎、先祖に恥じるような生き方はするな」といったという場面を読み上げて置く。

ここでブラジルが出て来ている通り、来年3月には相沢セイと結婚し、4月にはブラジルに渡ることに決まっていたのである。実は専太郎は菅礼之助の推薦でシンガポールのゴム園の医師として勤務しようとしたのであったが、私学の出身であるということで目的を達せられなかったのである。それならということでブラジルの移民船へと方向変更をした訳であろう。

数日後に彼は郷里横堀から上野行き汽車に乗った。見送りには忠兵衛とその長男頼助と三女アツのいとこ、伯父の宗助、母スエと弟久次郎などが見送った。実は幼友達であったアツは宗助の長男宗太郎と結婚し、8歳の長男と4歳の次男を持ったのに、この年6月に未亡人になっていたのがあった。母に伴われた兄弟の子供がホームで泣いたという程見送る人は感極まり、車中の彼も肉親を置いてブラジルに向う身として激しく心動いた

ことであろう。見送りの親戚たちに「礼を言った。そして後に残す母と弟久次郎のことを頼んだ」と同書は記述している。

叔母はその年のうちに、正に年末の12月30日逝去したという。大正6年(1917)32歳の彼は4月20日神戸港出帆の若狭丸で1351名の州政府から渡航費補助を受ける予定の補助移民と共にブラジルに向かった。3月に結婚したばかりの横浜生まれ東京育ちのセイ新婦も同伴した。彼女は24歳であった。

移住組合の囑託医であって移住組合教育部長黒石清作と一緒にあり、ブラジル到着後高岡は教育部改組係長の任も兼ね、創刊した「ブラジル時報」の紙上で衛生指導に当たることになる。

航路はシンガポール・マラッカ海峡・印度洋・ケープタウン経由で57日間航行し6月15日にサントス港に着いた。一旗揚げて日本に凱旋しようという人々が多かったというが、殆どは農業移民なので、荒地や藪を開墾する生活の中でマラリアで斃れる人が極めて多かったという。

もちろん医師の彼は都市サンパウロに住んでいたから自分がマラリアで病死するような危険はなかったであろう。やがてブラジルでいえば1918年(大正7)長女ゆみ、翌年長男健太郎、21年次女つや、23年次男庸次郎と子供も生まれ育った。

移住組合所属の立場でと併んで医師個人としての診療所医業を行っていた。到着したその年の8月31日大正時代の「天長節」に創刊号を出した「ブラジル時報」はブラジル最初の日本語活字新聞だったという。

大正6年8月の発刊から高岡はこの紙上に医療や衛生について、教示指導する記事を掲載し続ける。殊に大正7年には「マレッタ」に関して7回に亘るシリーズを書いた。

マレッタはすなわちマラリアである。ブラジルに入って間もない頃に、黒人青年が「働かないか」と農場関係者に誘われて「マレッタ患者はいないだろうな」と、給料よりもマラリアを気にしているのを目撃して衝撃を受けたと押切著書には説明している。

当然たった一人の日本人医師として、日本人の農場でもこの病気は恐るべきものであったから、彼はそれを相手に奮闘することになる。ブラジルの医師免許を持たずに開業したことを当局から咎められたこともあったが、日本人移民のために必要と日本領事館からの嘆願もあり、リオデジャネイロ医科大学において資格を認定されて診療に従事でき、ブラジルの医師開業試験に1924年(大正13)には合格して堂々と診療に精励した。

ファグデスという処にあった診療所ではいつも患者が一杯で、胃や盲腸の手術も行われたといい、玄関の戸が擦滅する状況だったという。薬の処方などは夜になることも多く、薬包には子供達も手伝ったという。日本人社会では唯一の神の手とでもいうべき存在だったのであろう。

もちろん彼は汽車や馬や驢馬を用いて日本人入植地を訪ねて診療を続けたのである。周囲の人々への予防や治療の衛生知識の普及にも努めたという。さらに驚くべきは「病気が重くなり、働くことができなくなった人には、病気がよくなるまでその家族を経済的に支えた」(『高岡専太郎』)という崇高な行動も示したのである。

1921年(大正10)の藤田敏郎サンパウロ総領事の管内視察に基づく本国政府への意見具申により、3年後の1924年(大正13)2月にその時の斎藤和総領事が現地在住の有志と協議の結果「日本人同仁会」を設立した。日本内務省から「移植民」医療衛生のために3万6000円の補助金下附があったのである。

同仁会は日本人の「自治衛生機関」(前出書)だったので病院建設が最終目標だったというが、当然医師の彼は組織の主要メンバーで、一期・二期は理事、三期1926年すなわち大正15年は専務理事で、事業全体の企画・実行まで行ったのである。翌27年には『マレッタをどうするか』という小冊子も執筆し、7月から12月にかけて現地調査指導で京都帝国大学戸田正三教授の指導も受けた。しかし「官憲の方が三、四年で代はるため、新しい監督に了解を得るのに一苦労する」という述懐もされている現実であった。

述懐を超えたものでは、「同仁会の金を医師が

分捕って私腹を肥やしてゐると世間に宣伝してゐる人も居るが、私としてはかなりの犠牲を払って同仁会の医師として全力で働いてゐる。こんな話をするのは最も嫌なことである」という表現をしていることもある。

やがてこれは数年後顕在化するが、同じ船で来伯した黒石清作教育部長の「ブラジル時報」に拠っての潜航的攻撃だったのである。高岡は「日伯新聞」の三浦社長を排斥する動きと併せた攻撃を受けていたのである。

そのような不穏を背後にしながらも、高岡は現地医療の展開と共に、自己充実の壮挙に出る。勿論それはマラリアによるブラジル移民の病苦を救おうという熱意と共に遂行されたものである。

彼はブラジル移民のマラリア苦を領事館を通じて日本に訴えようとしたが、反対派の動きもあって殆ど成果を得なかった。

戸田正三博士の勧めもあり、学術雑誌「国民衛生」(第七巻第六号)に「平野植民地の受難」という論文を載せて彼はそれを訴えた。彼が27年(昭和2)に野村忠三郎助手・古関徳弥技師と実地調査をした「平野植民地」の1915年(大正4)から16年(同5)に起こったマラリア禍に関する論文である。

1930年(昭和5)1月23日「日伯新聞」に「私儀今般一時帰朝、来る八月中帰宅、従前の通り診察に従事致すべく、此段御知らせ申し上げます。一月二十三日 高岡専太郎」と広告を載せ24日セントス港出航14年振りの帰朝の旅路に就く。

夫妻は1年間休学した子供4人も伴った。彼は46歳、セイ夫人38歳、長女ゆみ13歳、長男健太郎12歳、次女つや10歳、次男庸次郎8歳で大阪商船「まにら丸」に乗った。リオデジャネイロを経て、パナマ運河航行、ロスアンゼルス寄港のういで3月21日横浜港に到着した。航海中毎日幼い庸次郎に冷水摩擦をさせ、兄もそれに付き合った。

上陸するとまず第一に横堀帰郷をした。3月27日であった。下の弟は東京に出ていたが、郷里に住む弟久次郎と母を喜ばせ、金沢夫妻の墓参などを済ませ、村中の人に外国居住の洋風文化の刺激を与えたという。ただ酒を呑まない彼は秋田流飲

迎会の酒宴には閉口していたということである。

5月9日には横堀小学校で講演をし彼のブラジル渡航の際に海外興業就職の保証人押切永之助の長男である永一も聴きに赴いたことが永一夫人の日記で伝えられている。11日には父親は勿論先祖の法要を行っている。

その後上京して淀橋区大久保百人町の菅礼之助邸を訪問し相当高価なお礼の土産を進呈した由であるが、大人物礼之助の反応は淡々としていて、人の為に苦勞しても相手は自分の力でやっさと錯覚する者が多く、馬鹿らしい場合もあるからと、「人の為に難儀して、気分が悪くなって血圧を上げてしょうがないから、頼まれたことはみな『お天道様』からだと思うようにした。『お天道様』だと思えば腹も立たない」と話す対応をしたと『高岡専太郎』の著者は推定しているが、こうした礼之助の冷静さある説論などが、或いは帰国開業なども考えていた可能性のある彼の心にブラジルに徹しようとの決意を固めさせたのであろう。

帰朝のもう一つの目的は京都帝大への学位論文提出であった。戸田教授の導きもあり、「主論文 其一まらりや及らいしゅまにおーぜ・あめりかーな予防ノ地勢的研究、其二らいしゅまにおーぜ・あめりかーな第一報 其三らいしゅまにおーぜ・あめりかーな第二報」と「参考論文」5種を提出した。

ただ『高岡専太郎』の著者押切宗平氏によると、「恩師戸田教授に会い、また同じ衛生学の二十名の若き学徒たちとの二～三日の実り豊かな時を過ごした後、どのような行動をとったかについての記録はない」と記されている。なお「らいしゅまにおーぜ・あめりかーな」とはフェリダ・ブラボなるブラジル特有の感染性皮膚病だという。

しかし学位論文そのものは、著者押切氏が平成20年1月に夜行寝台列車11時間の旅で翌朝6時35分京都着、駅前ホテルで著書の編者でもある姉の長谷川真弓氏と合流し、京都大学に至り、開館の9時に大学の図書館に入館、「運転免許証と引き換えに」特別資料室の閲覧室入室許可された際には、「テーブルの上に依頼した論文が既に用意されていた。紙ひもで十字に縛られ、結び目に小さ

なカードが下がっている。そこには『昭和七年一月十八日、高岡専太郎提出論文、八冊、医、可決 ㊦362』とあった。これは学位論文が一月十八日の教授会で可決されたことを意味している。その結果二月二十五日『医998号』として医学博士の学位が授与されたのである」という叙述で知られ、存在の確証が広く示される。

昭和5年7月14日、「もんてびでお丸」で神戸を出航した一家は、8月28日ブラジルに戻った。その船中にこの年3月慶応の医学部を卒え4月医師免許を得た外務省の留学医師細江静雄という乗客がいた。押切氏はその細江著『ブラジルの農村病』の中から「私は1930年七月に再渡航の高岡専太郎博士と移民船もんてびでお丸で同船渡伯した。博士一家はツーリストであり、私は移民であったが、仲良くしていただいて、航海中はほとんど毎日、ブラジルの熱帯病について講義をしていただいた。(中略)1935年私はブラ拓のバストスの病院からサンパウロ市の同仁会衛生技師として籍を移し、サンパウロ医大本科一年生として在籍しながら同仁会の仕事をするようになった。そして高岡先生の偉業である奥地の巡回に身を捧げるようになった」という一段落を引用している。高岡医療を理解した医師が如何にその立場を評価していたかがわかる。

世の常として味方があれば敵もいる。1931年(昭和6)1月8日「ブラジル時報」が「同仁会創設後七年間の経緯」と題して同仁会が「高岡ドクトル」の我儘横暴に任せられていると攻撃したのを初めとし、社説や読者欄で高岡攻撃を繰返した。

時報社の黒石清作は領事館と気脈を通じている者などと力を合わせ、高岡と近い「日伯新聞」の三浦社長を二度国外追放したうえで三度目に排除した勢いに任せ、高岡をも国外に追い出すか、在伯でも社会的に排斥し去ろうとしたのである。

遂に高岡も対応する。2月26日「日伯新聞」は「在伯同胞のため、止むに止まれず憤然と起つ。時の人高岡専太郎、こここのころ黒石清作、ブラジル時報紙全面を通じ執拗なる高岡氏攻撃を続けた、今や高岡氏憤然と起ち、この曲者をこらしめんと宣す」と報じ「私も徒に邦人社会を騒がすの

は嫌とずいぶん忍んで来ました。しかし先方がそうしたことをするのはと、断然戦端を開始する事に決め既に同仁会の役員諸氏に了解を得ておきました」という対話も掲載された。3月12日同紙上には「黒石清作君にただす。正々の陣をば張り、堂々の論戦を求む」という立場で自分の主張と同仁会への寄与について述べた。

結局1933年(昭和8)に安藤全八と共に「互生会」を立ち上げて独自の同胞診療活動を展開することになる。20年間の努力に自信を見せながら8月「家庭と衛生」なる月刊雑誌を創刊した。2万3507家族が前年の資料で在伯し、その中で6000家族が「互生会」メンバーであった。この雑誌や、37年(昭和12)刊行の『ブラジルの家庭医書』が会員初め邦人社会への寄与したところは甚だ大きい。

1939年(昭和14)サンタ・クルス日本病院が同仁会によりサンパウロに建設された。高岡の行った手術記録も残っているという。この病院では慶応の三田会が中核となって看護婦養成も行ったという。会のメンバーの藤村という人の娘2人もそこで学び姉の和子氏は婦長にまでなったが、妹のゆみ氏は「博士は自分のなさったことや手柄を、他人にアピールするような人ではなかった」「臨床医として診断、治療、予防などについては厳しい発言はするものの、その他の集会、例えば県人会などではあまり話をしなかったそうだ」という話をしたという。

著者押切氏は山形県酒田市出身の写真館主高山晴郎が、35年に渡伯し父がマラリアにかかり高岡博士のお蔭で助かったことを「先生はマラリアの権威で『マレッタ博士』と呼ばれ、本当に神様仏様のようなようでした。私は十七歳でした。おかげで父の命はどうか助かりましたが、もしあの時、父が助からなかったら、家族五人はどうやってあの荒山(チエテ移住地)で生活したであろうか分かりません」と語ったと叙述している。

1941年(昭和16)12月8日太平洋戦争が始まった。ブラジルはアメリカ側に立ち、日本に国交断絶を通告する。邦人社会で地位高い「マレッタ博士」も、42年9月高岡家も含まれる邦人の350家族はサンパウロの中心街コンデから強制立退きを

命ぜられたので、移った。

サントス沖でドイツ潜水艦が貨物船5隻を沈めた為にサントスからサンパウロに移された邦人を診療したことで博士は拘留されてしまった。戦争が終わったらブラジルには留まりたくないが高岡家は考えたという。

健太郎は軍に徴兵されたものの大学医学部に在学していたので土・日の兵役で週日は医学学習であり、庸次郎は工科大学生で士官学校に進んでいたという。姉ゆみは結婚し娘1人がいた。妹つやの結婚式も治安当局の許可が必要で披露宴には監視付きだったという。大学生の進んだ士官学校とは私共も学徒であり乍ら入学した「予備士官学校」のようなものであったのかもしれない。

1945年(昭和20)8月15日終戦。しかし領事館もない。国際放送やポルトガル語新聞に接していた人は日本の敗戦を認識していたが、敗戦を信じたくない「勝ち組」の「臣道聯盟」は高岡を暗殺リストの上位に載せていたという。

最も信頼していた野村忠三郎助手も46年3月31日銃弾を浴び死去した。彼も覚悟していたが難を逃れ、47年1月1日創刊「パウリスタ新聞」(北秋田郡出身蛭田徳弥中心の旧「日伯新聞」系)に「祝創刊、医学博士高岡専太郎フランサ・ビント街五百十二」と祝辞を寄せて、ブラジル居住の決意を示した。

昭和27年(1952)67歳の高岡専太郎はセイ夫人と再帰国をし、横堀小学校で再び講演をし稲住温泉の秋を満喫して戻って行ったという。

1963年(昭和38)5月19日脳軟化症で逝去行年79。勲五等瑞宝章を受けた。1978年(昭和53)春にはセイ夫人85歳が在伯邦人への福祉に貢献の功績で勲六等瑞宝章を受けた。サンパウロ中央婦人会設立などの評価であろう。

小西 正太郎

明治9年(1876)7月21日仙北郡六郷村米町に忠兵衛とフヨの長男として誕生。『六郷町史』では1日違いの20日誕生となっている。忠兵衛は六郷村2番目の金持で、毎年小作米500俵の納入があり、書画美術蒐集家として知られ、和歌・俳句

を詠む文化人であった。きょうだいは男6人女3人で彼はその長子であった訳である。ただ幼時から虚弱で特別大切に育てられたといい、小学校にも厚い庇護のもとで通ったという。

美術品の豊かな生活環境は彼の人間形成に大きな影響を与えた。明治22年県立秋田中学校に入学する。28年(1895)中学校を卒業して、東京美術学校予備科に進学する。日本画科で古典の臨写に励み、「成蹊」の号を用いていた。29年に最上秀子と結婚し、翌年長男正一郎が誕生することになる。

美術学校は明治22年上野に開校されたが、初め洋画科はなく7年後の29年に「西洋画科」が開設された。黒田清輝が大いに新風を吹き込む教育活動を展開していたので正太郎もそれに師事して30年に西洋画科に転科した。

妻帯者であるのみならず父親でもある画学生なのに、極めて派手に遊んだという。秋田美男であったので、同じ六郷出身の作家小杉天外の小説「魔風恋風」のモデルの一人であるといわれている。いうまでもなく天外と彼は「一時共同生活もしたこともあるという」と『六郷町史』には記されている仲である。

同書はこの小説を載せた『読売新聞』が売り切れて再版までしたことを、「秋田魁新報」が「日刊新聞を再版せしめた呼物は稀有の事で、露伴にも、逍遙にも、鷗外にもかつてないこと」と評したことを述べ、さらに「都新聞」が「編中の人物は現に存する人をモデルと為せしものなれば、皆各特性を發揮し、紙上に活躍すること他の空想小説の比に非ず」と報じたことを記した上で、「六郷の人々の間に大いに話題にのぼり、そのモデルが誰であるのかが問題となった。天外より九〜一〇歳若い帝大医学生(現東大医学部)となった本道町の藤井新八郎や美校生(現東京芸大)であった米町の小西正太郎らの学生生活が彼の胸中に去来したであろうことは想像にかたくない」と記している。正太郎の情報に接し易い筈の六郷の人々の判断は興味のあるところである。

学費豊かな彼はカメラなどの趣味も多彩であった。胸を患うという問題点はあったが、35年(1902)美術学校を卒業した。秋田県内最初の東

京美術学校卒業者となった。しかし健康上から茅ヶ崎で入院生活を送ることになった。両親は同地にアトリエも設けた。カメラ人として作品の写真展も開いたという。

37年(1904)帰郷したが、3月31日付で秋田県立横手中学校の助教諭に就任することになった。明治37年は奥羽本線が開通する1年前である。仮に汽車が通っていても六郷も角間川も駅の設置を敬遠して、飯詰に駅が置かれるのであるから住む六郷から汽車通勤で横手へという現実はこの年段階では実現し得ないことだったのではあるが、この先生は自家用人力車で勤務校への往復をしたというのである。しかしそれも長くは続かず11月には辞職してしまう。多分健康上の理由であろうと考えられている。

明治41年(1908)長女が生まれたが翌年亡くなり、43年に次男が誕生した陽造である。ところで44年9月何と政友会所属秋田県会議員に当選することになる。

芸術家でも望んで議員になることもあろうが、これはそうではなく素封家が議員に引き出される例であったようである。大正15年という後年の出版ではあるが、美術誌の「藝天」に、杉浦非水が書いた「小西正太郎氏を紹介す」では議員生活の4年間は「煩悶」していたと書かれているのである。

大正4年(1915)その記事を証明するが如く、県会議員は1期で卒業してしまう。そしてこの年、後年生活上最も関係が深くなったと考えられる三男の禮三郎が誕生した。なお四男の四郎が生まれるのは大正7年である。この頃彼は地方在住の芸術家として、身近の若者たちに「農民美術」というものの指導をしたいと志向していたといわれる。何か不完全燃焼とでもいふべき心理状態だったのではあるまいか。

大正10年(1921)夏、数え年46歳の彼に刺戟があった。同じ仙北郡出身で美術学校卒業も共通する平福百穂の一行が秋田県を訪ね、十和田などに遊んだが、その途中六郷の彼の許も訪れたということがあったというのである。睡っていたとか、諦めて我慢していたとかの彼の芸術家魂に一行が火を点じたのであろう。

11年5月8日学友たちと相い携えて芸術の都パリに渡ることになる。パリアカデミーに属し、古典的なミレーやセザンヌなどの模写学習はやりながらも、初めは専らカフェなどに遊びと受け止められ行動をしていて、熱心に勉強しているようには見えなかったらしい。

しかしこれは、フランスを生で体験しその美の根源に接しようとしていた意図的なフランス慣れの時期だったようである。1年遅れてフランスにやって来て、背中合わせの宿をとっていた杉浦非水も、「二年間をフランスの人間を理解しようと努めた」と評価した記述をしている。

ドイツに旅行し、それから帰ると「遊びに厭きた」と、一緒にフランスに来た友人たちは、パリ郊外の風景の写生をしているのに、その中で、ひたすら裸婦を描いていたのである。13年の春になると、サロン・ナショナル展に「臥せる裸婦」(60号)を出品し、その目録に日本人としては藤田嗣治の例しかそれまでにないという掲載を受け、入賞したという厳然たる成果を挙げて、実力を発揮するのである。

14年(1925)には各種の会員になり、サロン・トートヌヌ展には「本を持てる女」を出品するに至った。さらにはまたギャラリーの個展も開くという充実した活動を展開する。

しかもこの個展に関しては、評論家ヒューザン・モレーにより「抒情詩的に取り扱われた裸体美、静物、フランスの花、フランスの木の実、フランスの女性に対する君の情熱は、その芸術精髓の体得を証するものである」と賞賛的に評されるのであり、彼の芸術がフランス的、国際的に見ても「実力」のあるものであったことが分かる。

従って、滞仏中に六郷の家が火災で焼失し、経済的に送金などに問題が生じていたにもかかわらず、その不自由も何のものかは、「一ヵ月でも長くパリにいたい」といっていたという。

足かけ4年のパリ生活にピリオドをうつ大正14年の12月が来た。藤田をはじめ20人余りの在仏の友人や交際者たちが送別会を開いてくれた。柔道家の石黒敬七などもおり『六郷町史』によればフランス人モデルもいたという。石黒は第二次大戦

後のラジオ番組でも有名になる人物である。

また先にも挙げた杉浦非水は美術雑誌「藝天」(大正15年)の「再生の小西正太郎を紹介す」で「病を養ふた十数年間画筆から遠ざかり、刺戟のない田舎に引っ込んだ為に絵が出来なくなったのも無理はない。-中略-此の時分のこの煩悶から、氏は筆をとって行くと云ふことは自分の使命であると考へられ、この時分から洋行の熱が高くなった。丁度その折に、中沢弘光・跡見泰・山本森之助・矢崎千代治氏等の連中が渡欧するので、此期逸すべからずと氏も同行することになった。氏の芸術生活に大きな動機になった」と評したが、中沢・矢崎は美術学校でも二期上の近い先輩だったし、跡見は一期下だったというから、滞仏期間中において、若き日病弱だった主人公にはこの友人達の存在が心強いことであったと推察される。

津田信夫美術学校教授は大正12年(1923)にパリで小西と一緒にところを杉浦の写真に写し出されているが、パリに於ける小西を「自分のよい所を真面目に考えて突き進まれた」と認めたという(井上房子「小西正太郎」<『小西正太郎画集』所収>)が、先の杉浦も「パリを辞する数ヶ月の作品は、非常にクラシックな細い筆触の真面目な行方に変って来、本当の値打ちがいよいよ発揮せられた」と記すように、彼は真面目な秋田人の本性を余すところなく発揮して、パリ留学を完了したのである。そして色彩豊かで華やかな画面から形体重視で抑制のある色調になったという。

大正15年(1926)春帰朝する。直ぐ帰郷してから4月23日から28日まで、東京市の日本橋三越で「滞欧作品展」を開催した。平福百穂、小杉天外、杉浦非水、結城素明などが推薦文を寄せた「目録」の示す80点が出品されて高い評価を受けた。

翌月の中旬からは秋田の3新聞社の後援で秋田と大曲でもこの展覧会が催され、郷党に大きな誇りをもたらし、その努力と成果に高い評価が形成されることになった。当然小西画伯本人の心にも不動の自信と鮮烈な意欲が生まれることになった。自分自身の居住を東京府荏原郡世田ヶ谷町池尻の地に定め、更に東京市神田区錦町に「自由研究所」を開設したのである。

そこでは医師や役人・銀行員・会社員・職工などの勤労画学生たち20名ほどの学習者を、熱心に指導したのである。先にも触れた若き日の療養生活時代に、地元の若者などに「農民美術」を指導養成したいと念じていたという目標を、今や一段高めて、長い間の夢に結びつく教育活動を実現したということになる。

昭和2年(1927) 広くフランス帰りの画伯の力働が認められて「白日会」の会員に推された。そしてその中核部に位置して活動し、その展覧会に「果物と松茸」「耕作」を出品して評価され、第8回帝展には「水浴後」を出品して一層観る者に印象を深めさせた。

やがて「二科会」や「光風会」などにも出品するようになる。このような活躍は、世田ヶ谷に居を定めていたのに、アトリエはあの若き日からの茅ヶ崎になおあり、そこで作品を描かれることが多かったという多角的な意欲に導かれたのであろう。だから昭和4年(1929) 東京における「秋田美術展」(後に「在京美術展」となる)には6点を出品する制作充実ぶりであった。

昭和9年(1934) 大森区田園調布にアトリエを建てた。58歳である。其処は長男が温室業を営んでいて、彼が土曜日曜などによく訪れ、植木や草花の手入れを楽しみ親しんでいたところであった。「自由研究所」を時勢によって廃止してからは、専らこのアトリエで制作活動をし、時に茅ヶ崎のアトリエに出かけるという生活になったという。

11年12月15日に歯科医であった次男陽造が27歳の若さで死去する不幸があった。12年の田園調布温室で三男禮三郎と彼の立っている写真がある。こういう優しい三男がいるからという安らかな表情で鳥打帽をかぶっている。

さらに昭和17年(1942) 12月に温室村で撮した写真もある。そこには陸軍中尉である四男四郎も写っている。もういわゆる「大東亜戦争」の太平洋戦争が起こって1年たっている。「初年兵教育の為3度内地帰還の時」という詞書が付いている。青年将校の眼は生々していて真面目な性格が表れている。

昭和19年米空軍の本土攻撃は次第に激しくな

る。生活も深刻化する都会から、基本的には安全な郷里を志向するのは必然である。三男禮三郎が前の年7月から叔父宗吉の没後六郷郵便局長を継受していた郷里に疎開という形で、帰郷するのである。禮三郎宅別棟に生活することになる。

本来豊かな育ちをして来た生家に帰って心にも食生活にも安定を得れば、風雅の日常が戻るのも自然である。多趣味な本来の生活を構築するが、戦況の末期化は20年4月13日四郎が守備地千島列島シュムシュ島において24歳の若さで戦病死するのであった。悲しみは深かったに違いないが、別にいえばこれはこの時代の社会の少なからざる現象でもあったのである。

画伯は自宅の裏手に2間続きの義太夫練習所を建てて、自らは勿論、趣味を同じくする人々と習練し楽しんだ。間もなく終戦となりいわゆる戦後社会となり、パリ生活体験者の画伯はバタ臭い料理を作ったりして自主性を貫きリングスープなども作った。動物も飼い草花を植えて楽しみそれも描くという戦後抽象画などとは無縁の立場にあった。

もちろん戦前の町田忠治像(昭和9年)、奈良磐松夫妻像(昭和10年)、土田萬助像(昭和12年)など、彼の描いた肖像画は知られているが、この戦後段階になってからも知人に頼まれたりして肖像画をものすこともあったと『六郷町史』にあるが、塩田団平夫妻像(昭和20年)などは代表的なものであろう。陸軍大尉四郎の像(昭和21年)は週番士官の防寒帽スタイルである。北辺で散った息子を追憶したのであろう。そういえば陽造・禮三郎・四郎らの少年時代の絵もある。

昭和31年(1956) 4月26日脳出血にて逝去、数えで81歳。菩提寺本覚寺に墓所がある。51年3月から4月の約1ヵ月秋田市美術館の「県内の洋画家たち」で彼と田口省吾作品が展示される。62年3月から5月まで秋田県立博物館でも「小西正太郎展」が催された。

湯澤 幸吉郎

明治20年(1887) 5月2日南秋田郡廣面村廣面の農業幸市の三男に生まれる。生家は浄土真宗鳩

依の旧家であった。従来広面の地名は、文禄元年（1592）8月22日付「秋田家分限帳写」に「馬場広面（屋）村」とあるのが初見史料であった。

しかし「秋田城跡調査事務所」により平成初年に行われた第五四次の発掘調査で「廣面郷 草並神調」と書いた木簡が発掘確認され、古代郡郷制の中で秋田郡廣面郷は存在していたことが解った。

慶長6年（1601）の「秋田家分限帳」でも「馬場廣面村」や「馬場村 廣面村」の名は明記されていて、近世になっても「正保国絵図」では「本田当高351石」、「享保郡邑記」では70軒でその中に枝郷の赤沼、谷内佐渡、樋口、ニツ屋の分が49軒含まれると記載されるなど、存在明白の村である。

近代では「廣山田村」の呼称が知られているので、幸吉郎が廣面村に生まれたとするのは不相当のようでもあるが、以下のような行政変化があったのである。主人公の生まれた20年は旧来の廣面村であった。

明治22年に、前年公布の「市町村制」が実施されるに際し、廣面・蛇野・柳田・楯山の4カ村が合併して「廣山田村」となるのである。村役場は谷内佐渡に置かれた。21年の段階では広面184・蛇野27・柳田69・楯山244の戸数であった（「秋田県市町村要覧」）。そして昭和16年秋田市に合併の折に蛇野は手形に所属することになったのである。

27年（1894）廣山田村立楯山小学校に入学した。住宅の一番多い楯山村の方に学校は置かれていたのであろう。33年に小学校を卒業し県立秋田中学校に入学した。旅好きでよく男鹿や象潟などを訪れる少年だったという。38年（1905）秋田中学校を卒業し進学する。

入学したのは東京高等師範学校で、専攻は国語国文学科であった。秋田方言と標準語との出会いで「言語」や「方言」に関心を深めたといわれる。このことについては、それよりは38年程も後になるが私も忘れ難い体験があるので「さもありなん」と思う。

それは昭和18年（1943）3月旧制中学校を卒業し関西言語圏の学校の受験に赴いた際のことである。山形県という東北弁圏から羽越・信越・篠ノ

井・中央・関西という国鉄線を経由すべき切符だったのであるが、羽越線の駅で乗った大阪行列車が戦時中超満員状態で遅れが生じ、直江津駅で乗り換えるべき列車に間に合わなかった。

車掌の提案に従い北陸・東海道両線経由に変更、滋賀県草津駅から草津線に乗り換えて関西本線の栢植駅に出ることにした。独り旅は心細さより未知への興味の方が勝っていたが、周りの方言には参った。

栢植駅のホーム待合室で関西線の列車を待つ30分程、登校時でホームに溢れる女学生達のお喋りの真っ只中にいて、全く解し得ないのであった。次第に耳が慣れ推知できたのは、彼女等の「うちなァ」という語りかけの「うち」が、我々の用語の「家屋」や「我が家」の意ではなく、第一人称代名詞で「私」「自分」の意だということだけであった。

理由は今と異なり関西弁などはエンタツ・アチャコの落語レコードぐらいしか聞いた経験がなかった故である。その時私は「よしッ、この言葉には負けないぞ」と自分に言い聞かせた。今日の館話に於いてそれを想起し、明治に東京で秋田出身学生の考えたことが理解できたのである。

43年東京高等師範学校を卒業し、富山県立薬学専門学校に教員になり赴任する。資料には「助教諭」とあるが、専門学校に「助教諭」という教職員がいるとすれば、予科的な課程があったのかもしれない。私が現職の時代国立富山医科薬科大学であったが、その前身は県立の大学であった。更にその前身がこの専門学校なのである。だが何か不本意なところがあったのか1年で移動する。

明治44年（1911）5月東京府立第四高等女学校教諭となる。極めて秀れた教師であつたらしい。というのは、この高女も僅か2年に満たない期間の勤務にすぎなかったのに、生徒たちは彼の人品・学力・指導力を敬慕して「信婦（しのぶ）会」を結成し、師の晩年までその崇敬の活動を続けたからである。

大正2年（1913）4月に東京帝国大学文科大学国文学専科に入学した。思うに北陸に赴任したのに直ぐ帰京の真の目的はここにあったのである

う。そこで上田萬年教授の指導に基く「抄物」研究という大きな命題についての、関心醸成と、その展開が導かれたのである。

昨年「松田解子」について話した際に、彼女への親切で注目した女流作家円地（上田）文子は上田教授の次女であった。教授は名古屋出身で大正8年～15年神宮皇学館長を兼務した。

4年(1915)3月東大修了の湯澤は、保科孝一高等師範学校教授の奨めで文部省嘱託になる。「道德教育」に関する調査を担当する職務で、週に数日出勤であったから、自由研究時間も持ち得た。

保科教授は明治5年隣県山形の米沢に生まれた。帝国大学文科大学の卒業で、明治35年(1902)発足以来の「国語調査委員会」で国語教育問題に関与して来た学者で、昭和5年(1930)に東京文理科大学教授になる。戦後は漢字制限や仮名遣い改訂の運動を推進した人物である。同じ東北人として湯澤に親近感があったのであろう。昭和30年(1955)7月逝去するまで、この方面での推進者であった。

大正5年に道德教育から「国語」に関する調査を担当するように湯澤の職分が変わり、いよいよ本領が発揮されることになった。夕食後仮眠の後、夜を徹しての抄物研究を展開した。

同門の後輩吉田澄夫氏によれば「文部省臨時国語調査会嘱託」という職掌であった。調査会長は上田萬年氏で、この組織は昭和9年になると「国語審議会」になる。言文一致運動などにも関わることになった。

上田教授に研究の導きを受けた「抄物」は、京都五山の僧侶の仏典や漢籍の講義の記録なので、文語で書かれている普通の中世文献とは異なり、「語り物」の「口語」を研究する対象にできる資料であった。

大正11年(1922)に恩師保科孝一と共著の『大正漢和辞典』（育英書院）を出したりした後に、15年「口語資料としての抄物」（『国語と国文学』）を6月に発表した。

昭和2年(1927)になってからは3次に亘り、「語法上から見た秋田方言」（『国語教育』）を、3年には「天草本平家物語の語法」（茗溪会「教育」

などを発表した。遂に昭和4年(1929)12月、橋本進吉博士の勧めで『室町時代言語の研究』（大岡山書店）を刊行し、中世語研究の宿志を達成し、それから近世語の分野に研究を進めることになるのである。

その勤務と研究の間を縫って家庭教師もしていたという。吉田澄夫「湯澤幸吉郎博士の人と業績」（『国語学』54・1963〈昭和38〉）によると、「昭和のはじめのころは、文部省に終日出勤、他の日は、芝新銭座にあった攻玉舎中学に教えておられた。夜分は富豪安田氏の飯田町邸に出向いて、その子女に教えておられた。安田主人の湯沢氏に対する信頼は絶大であったと聞いている。そういう富豪の生活ぶりについてよく雑談の時に話しておられた」ということであった。秋田人湯澤の人柄も俚ばれる。本人は小石川東五軒町に居住していた。

そういえばこの文章の終末部に「湯沢さんは、秋田市近郊の旧家の出身であった。祖先以来の伝統的信仰心によるのであろうか、仏教の信仰に篤く、深く浄土真宗の教えに帰依しておられた。調査室で時には経文を読んでおられた。無欲てん淡、名利の念にうとく、一生を学問研究に精進された湯沢博士のごときは、真に現代の高人と称すべきであろう」という叙述がある。財閥安田邸の人々も、このようにこの学者家庭教師を受け止め評価したのであろう。帰宅後一休して午後10時から早曉まで勉強していたという。

昭和5年(1930)には、「狂言の『です』の起源」（『国語教育』）・「国民性の反映としての国語」（『教育』）・「自己に敬語を用いた古代歌謡等について」（『国語と国文学』）・「口語の『読メル』『サレル』等の取扱方に就いて」（『国語教育』）などを発表。6年には『解説日本文法』（大岡山書店）を刊行。さらに語法・文法に関する数篇の論文を発表し、7年には前期に「奥州本義経記の考察」を目黒書店刊の論文集に発表、12月には「近松物に見える東国方言に就いて」（『方言』）を発表する。

8年(1933)には6月「敬讓助動詞『せ（させ）らる』の徳川期に於ける変遷と『やんす』『やす』の本質」（『国語と国文学』）を発表し、いよいよ

近世語の領域で成果を示す。この8年には東洋大学教授に就任することになる。

昭和11年9月『徳川時代言語の研究』（刀江書院）を出版し、10月には「現行国文法教科書について」（『国語と国文学』）という、学問と文部行政の両面を識る人らしい論説を発表する。翌12年には『国語史（六）近世篇』（刀江書院）を3月に、「国語の統一・近世語」（『学苑』）を10月に出す。13年には「近世の語法」（『国語と国文学』）を10月に発表する。

世界中が戦時色を深める昭和14年（1939）には、「記紀歌謡と古代語法」（『学苑』）を4月に、「増鏡の中の三疑義」（『国語解釈』）を9月に発表するなど、古典回顧の傾向も見せる。

ところで昭和13年・14年に編修された中学校用教科書の『新文典』（富山房）という書籍がある。これについては、先に触れた吉田澄夫筆の「人と業績」の文中に注目すべき解説がある。

すなわちそれによると、橋本進吉編修になっているが、昭和6年から11年までは初年級用と上級用に分けられており、13・14年口語編・文語編に編修されたものだというが、昭和5・6年の頃から橋本博士と湯澤氏の協力に依って編述されたものだという。第一原稿は湯澤が執筆して提出、橋本の朱筆が多量に入れられて第二原稿が作成されるという手順だったという。

原文を引用すると「ほとんど原形を止めぬほど、赤インキで修正された原稿を、たびたび湯沢氏に見せられた。そしてタメ息まじりに、『こんなに直されたんですよ』と嘆息を洩らされた。時々は大分意見がちがって議論されたようでもある」とある。関係者の密接な協力が窺い得る。

さらに注目すべき面白い場面描写もあるので、続いて引用しておく。「昭和四・五年ごろであろうか、何かの学会の帰途、橋本さんと大学正門から赤門の間の舗道をおあるいと、湯沢さんのうわさが出て『あの大将もなかなか努力家だね』といわれた。『あの大将』という言葉が使われたのが、今も耳にのこっている。名馬が伯樂に見出されたというのは、こういう人間関係をいうのであろうか。」という興味深い文である。正に信ず

るに足る湯澤氏の一面の描写であると受け止められる。

昭和15年（1940）は「皇紀二千六百年」と謳われた時勢の真っ只中であるが、主人公も50代半ばで『国語学論考』（八雲書林）を2月に出し、16年には「敬讓語について」（『国語運動』）を5月に発表、更に敬讓語関係の業績を7月・11月に出す。

そして昭和17年6月文部省図書監修官に就任して12月には「古代に於ける話言葉」（『日本語』）を発表する。世の中はもう「大東亜戦争」と呼称された太平洋戦争の泥沼にはまりこんでいたが、彼の研究成果の発表は続いた。18年1月『国語史概説』（八木書店）、5月には『日本語小文典』（国際文化振興会）・『現代国語の諸相』（岩波書店）を刊行。近現代日本語にまで研究領域の進展したことが分かる。

19年（1944）6月『現代語法の諸問題』（日本語教育叢書・日本語教育振興会）を刊行し、21年には3月で文部省図書監修官を停年で辞職する。12月には安藤正次等と『当用漢字と現代かなづかい』（ミタカ国語研究所編・三省堂）を共述している。20年の業績は特に知られていないが、終戦という大事態の故であろう。22・23年の出版や論文発表も伝わる資料上では見当たらない。

昭和24年（1949）4月早稲田大学教育学部教授就任。25年過労により体調を崩す。初め杖を頼りに出勤し教壇に立っていたが、やがて病床に就くようになった。それでも学生達は教授を慕い病床に集って卒業論文の指導を仰いだと教え子と考えられる宮本栄氏が『秋田の先覚』4に書いている。府立四高女の時と同じ名教育者振りである。

28年健康が戻り教壇復帰し、研究熱心で誠実な先生を敬愛する学生達は、29年6月「湯沢幸吉郎を中心とした国語研究会」を結成した。そしてこの29年には4月に『江戸言葉の研究』（明治書院）が刊行されたが、実は遙か以前にできていたのが戦中戦後の関係で、出版が延び延びになっていたものだと吉田氏が述べている。

昭和30年（1955）3月文学博士の学位を得た。大きな喜びであったろうが、5月には悲しいことがあった。写実性秀れた吉田氏の文章を引用する。

昭和三十年五月、恩師保科孝一先生の病篤しと聞いたので、いそぎお見舞しようと思ったが、これは湯沢さんとご一緒の方がよいと考えたので、夕方新宿区戸塚の都営アパートに湯沢さんを訪ね、折よく居られたので、玄関先で日時を打合せ、数日後に同道して、保科先生の病室までうかがった。国立東京第二病院の二階であった。

八十三才の老先生は胃ガンということを知っていたし、食事も十分通らず、輸血とリンゲル注射だけで持っているという話だったが、案外気力はしっかりしておられて、さすがにヤツレの見える顔をこちらに向けて、われわれの述べる見舞の言葉は、ろくに聞こうともされず、「このごろどうしているか」という意味のことを先生はいわれた。湯沢さんは「学位を受領しました」旨を報告された。保科先生は「それはよかった」といわれた。そしてわたくしの方へ視線を向けて、やはり学位に関することを二言三言いわれた。「どうぞお大事に」といって、病室を辞した。その時間はわずかに4・5分であったろうか。湯沢さんは高師の学生時代から数えたら約五十年、わたくしにしても学生時代から数えれば三十数年、ずいぶん長い保科先生とのつながりであったが、これが先生との永別であった。

病室を出て、ドアを閉めたかと思うと、湯沢さんは、そのドアによりかかるような姿勢で、突然声を放って泣き出された。わたくしは数歩さきに立っていたのであるが、思わず振り返った。びっくりしたが、つぎの瞬間にはその意味を諒解した。そばに看護婦が一人立っていたが、アッケにとられたような表情であった。2・3分間そのまま慟哭しておられたが、やがて白いハンケチを出して顔をふき、「帰りましょう」といわれた。あの大きな声が病室の先生に聞こえないはずはない。どんな気持ちで先生は、湯沢さんの慟哭を聞かれただろうか。

臨終間近い、八十三才の老先生と、六十七才の愛弟子、五十年の師弟の交わり、はじめは師弟の関係、のちには上司と部下、長年苦楽を共

にされた間柄である。ほんとうに突然の慟哭、われ知らずこみ上げてきた号泣というのか、あの時はほんとうに驚いてしまった。

というのがそれである。他の人では書き得ない貴重な、湯澤幸吉郎の誠実な人間性描写である。

昭和31年(1956)5月14日、前年の江戸言葉の業績により『日本学士院賞』を受けた。そして品詞や敬語法など文法学の業績の発表が続く。34年11月の『文語文法詳説』(右文書院)などは特に目を惹く。この間33年3月には早稲田大学を定年退職するし、4月には都立大学講師となり、34年4月には上智大学教授となる。高等教育界で博士の教育力が評価されていたのであろう。

37年に「湯沢幸吉郎を中心とした国語研究会」は「早稲田国語懇話会」に名称は変えるが、本人は既刊著作の増補の努力が続けられていた。一方12月頃から時々体の「だるさ」を覚えるようになったとの宮本氏の叙述がある。

昭和38年(1963)1月中旬に行われた「早稲田国語懇話会」には、体の不調を押して出席し、上智大学の卒業論文指導にも出掛けていたが、風邪を拗らせて、3月8日慶応大学の附属病院に入院することになる。しかし肺がんだったので4月9日午後逝去した。行年77歳。新宿の大宗寺で告別式が営まれ、多摩墓地に葬られた。

小田島 樹人

明治18年(1885)3月19日鹿角郡花輪村谷地田町225番地で、初代鹿角郡長の由義(ゆうぎ)・ハツの次男次郎が誕生した。偶然であるが本年の「館話」に登場の先覚は、勇二郎・敬次郎・専太郎・正太郎・幸吉郎・次郎と全員「郎」を名乗りを持っていることになった。

次郎の父も13歳の時に花輪小田島徳兵衛養子となって「徳弥由義」を名乗ることになったので、弘化2年(1845)尾去沢銅山支配人内田九兵衛末子に生まれた幼名は丑太郎で、やはり「郎」名であった。少年期盛岡の作人館で学んで文武両道を修め、戊辰ノ役では花輪給人隊の幹部で、戦後官軍の進駐時は他藩応接係で鹿角安定に力を発揮し、明治5年には工部省鉾山局出仕となり、15年

帰郷して家業の酒造業井桁屋を継ぎ、17年鹿角郡長となった。14年間もその任にあり郡民の尊敬を受けたという。母も白百合会という婦人組織を指導活躍したという。そういう家庭に次郎は生まれ育ったのである。

32年(1899)花輪小学校高等科を卒えた次郎は、岩手県立盛岡中学校に進学した。父と同様南部人としての教学を身につけたことになる。37年盛岡中学校を卒業した彼は第七高等学校造士館理科に合格遠く鹿児島に進学した。化学・薬学を志していたという。

ところが翌38年5月27日花輪に大火があり、実家井桁屋も類焼する。家族は東京市赤坂区青山高樹町に引っ越した。東京での家業は木炭屋であった。恐らく南部の地元と連繋を保った営業だったのであろう。

次郎は家政の負担を考えてのことか、それとも明治時代の青年の人生哲学的な心境や心情の動きか、推論は色々できるし、体調のことがあったのかもしれないと、後年の病気休学のことなども考え併せられるけれども、38年に高校を退学してしまう。

明治41年(1908)東京音楽学校予科に入学。理科から音楽科へと転進する。彼の有名な中山晋平と同期である。音楽学校在学中は弟の六郎と「上野の森の音楽会」に出かけたり、「千住の堤」で音楽談義をしたりしたという。

六郎は青山学院を卒業し長じて中等教員として、花輪高等女学校や大館高等女学校の校長を歴任するが、胡六の俳号を持つ俳人でもあった。続いて述べるが兄次郎の影響であり、胡六も俳号樹人の兄がつけたものという。六郎は明治26年(1893)生まれであるが、上に明治24年生まれで青山学院に学んだ五郎もいた。なお樹人の号は高樹町に由来する由。

弟六郎とワグネル百年祭も体験し、学校から持ち出したそのワグナーの「ローエングリン」の楽譜原本により利根川畔で六郎に歌って聞かせたりした。中山晋平らと「子どものための音楽運動」を起こそうと語り合っていたというが、病気のために房総半島の富浦に転地療養をする生活も経験

した。2年間の休学があったようで、音楽学校を卒業したのは明治45年3月になっていた。

昭和44年9月3日の「秋田魁新報」夕刊に六郎寄稿の「花輪の芸能①」が載り、その文中に「小田島樹人が東京の音楽学校にはいった。彼は友人の中山晋平と、歌手の佐藤千夜子を郷里に連れてきて音楽会を開いたが、当時花輪にピアノがあるのは私の家の一台だけだった。ロウソク立てのあるピアノで、当時山葉から五百円で買ったものだ。おそらく県内でピアノは珍しいところで、音楽会があるたびに私の家のピアノが借りられた。トラックのない時代だから、運搬は四、五人の男が棒を通してかつぐ。それを見て『百助のピアノが行った。今夜は音楽会があるらしい』と町の人には言った」という引用が『小田島樹人 人と音楽-』（平成五年八月十日・小田島樹人先生顕彰会）の「鹿角の風土」の項中にある。

主人公の音楽学校在学中なら小田島家は東京在住と考えられるので、中山や佐藤は連れて来ることが出来たとしても、火災に罹った小田島家の跡では親戚の阿部家が「百助旅館」を営んでいた。そして胡六六郎は青山学院高等部英文科を卒業後、その阿部家を嗣ぎ、教職に就くのであるから、上の文はそうなるからの描写であろう。何れにしても小田島家及び一門に音楽文化と関わる家風があったことが知られる。

大正3年(1914)音楽学校本科卒業。7月芝三光小学校に音楽教師として就職。既に中山晋平は浅草千束小学校に勤務していた。次郎は俳句に熱中するようになる。ホトトギスの高浜虚子の門下である渡邊水巴の句会に出て句作に熱心だったという。

上の『人と音楽』の本には「大正四年、詩人海野厚と出会ったのは、運命的といってよい。海野(明治29年8月12日～大正14年5月20日。静岡市曲金出身。早大英文科生)は十九か二十歳。樹人は三十一歳、十一歳年長に当たる。ふたりの親密な交友について、海野の文が残っている(「あの頃のこと」曲水九一三・大正12年12月)。はじめは俳句仲間から出発する」と、次のように引用している。童謡という樹人の一特徴を形成する上で不

可欠な友人とも同志ともいべき海野の存在を重視しここでも引用してみる。

○ホトトギスの牛込船河原町の例会へもその頃から行きだした。予ねて話をして見たいと思つてゐた小田島樹人君にも親しくなり、…

○翌年（注・五年）の七月になって漸く俳句に夢中になりだした私は、樹人君や（久坂）花囚君を誘ひだして、初めて曲水吟社の例会へだしぬけに出掛けて行つた。赤坂丹後町の、谷間とも言ひたい位な樹深いもの静かな辺にあつた渡辺家の控家（注・曲水吟社主宰渡辺水巴別邸。大正七年ころの本邸は日本橋区浜町二ノ一。水巴の父は花鳥画家の省亭で浅草三筋町）

○その中に、丹後町で曲水吟社の連夜吟といふのが始まつて、私も通知を貰つた。私は早速樹人君を誘つて出席した。毎夜かかさず集まつたのが川越苔雨、青木よしを、梅林地球子の三君と、樹人君、私の五人だつた。

○樹人君と二人になると、歩きながら話すのは、その夜の句の事、苦しかった事、いつも決つてゐた。そして青山御所の裏門の前で別れるのだが、どうかすると、樹人君は電車のなくなった路を高樹町まで歩かねばならなかつた。堪らないから明日は一晚休養しや（よ）などと話して別れても、翌る晩になると、また出席しないではゐられない程引付けられてしまつて、休まずに行つて見る。と、樹人君もやっぱり来てゐて、顔を合せるなり、にやりと笑つたまゝ、もう句案に呻吟するといふ工合だつた。

○「曲水」第一号第一巻が出た（注・五年十月一日）。先生はもう丹後町の控宅を引払つて、浜町の本宅に移る事になつてゐた。

という文章である。

結核の細い体で長頸子なる俳号を持つ海野は、樹人・苔雨・よしをの3人と「寒燈吟社」をつくり、句会は同人宅持ち回りで、樹人の勤め先三光小学校の宿直室もその場で、彼の弾く楽器に合わせ海野が踊り出す場面もあつたというが、大正7年(1918)「赤い鳥」が創刊されると、海野は本領の詩作で童謡詩の発表に励んだ。

一方8年8月樹人は三光小学校を退職する。病

の再発によるというが12月6日三枝綾野と結婚をする。夫婦の間にはやがて春枝・京子・妙子・そして夏川静江にあやかつた命名という静江の、娘4人が生まれる。

大正9年(1920)4月ドイツ語をはじめ秀れた外国語の学力が評価されて、三菱金属鉱業研究所の図書係に採用される。図書係とはいふが厚遇された。次女の東郷京子は「たのしい思い出ありがとう。三菱の所長社宅に居りました頃が全盛、今でも豊かに胸に溢れます。何一つ不自由の無い日々、時折あなたがピアノ、母がお琴の合奏で童謡の数々を聞かせてくれましたね。お行儀よく座つて目を見はり耳を傾け、終ると両親に贈る拍手を力一ぱい、得難いたのしい思い出鮮明です」と平成5年8月10日付で「絆」（小田島樹人先生顕彰会『小田島樹人』所収）という文章の中に書いている。単なる図書係ではなかつたのである。

秋田中学校で後年教育を受けた井上隆明氏が『小田島樹人 人と音楽-』の「海野と出会う」の項で「社長顧問格で三菱金属鉱業研究所に迎えられる図書係となり、社長社宅の南品川権現台一二八一に住む。西欧の探偵本から小説、芸談、語学まで、樹人の読書は広きにわたつてゐた。後年秋田の生徒をして感歎せしめたものだ。あの蓄積は学生時代からのものにちがいない。化学や音楽よりも、読書の日々であつたはずだ」と書いている。「社長社宅」は、住んだ京子氏の「所長社宅」が正しいと考えられるから誤植であろう。

続けて、更に「ほどなく童謡作曲時代を迎える樹人だが、あのリズム感はかつてない華麗なものであり、そのなかに日本的哀愁が流れている。本居、山田、中山、梁田の曲とは明らかにちがう。西欧の音感がみなぎつてゐるのだ。西欧派のリズムを導入して、日本の子どものリズムに変えたのは樹人の功績である。それが評価される時代は、きっと来るにちがいない。デビュー作「赤い櫓」を聞いていただきたい。あのフランス近代音楽風な子供の情景の音楽表現は、広きにわたる文学の識見によって、習得したと思われる。とまれ、鉱業会社の図書係は読書や句作にとって、またとない職場ではなかつたろうか」と強調される教え子

の見解は当たっていることであろう。

何れにしても、音楽にも樹人その人にも詳しい井上氏の、「またとない職場」と認められる三菱の図書係は、主人公の経歴において極めて重要な意味を持つことになる。

大正11年(1922)11月に『子供達の歌』(白眉出版社)の第一集に、海野厚作詞の「赤い櫓」「秋の夜」を作曲し、12年1月の第二集には名曲の「おもちゃのマーチ」を作曲して、身につけている力を縦横に発揮し、中山・海野・外山国彦と「鳩の笛同人会」を結成する。12年5月の第三集には「向日葵」「山は夕焼」の2曲を載せる。

14年(1925)1月安田十九と「俳壇文藝」(俳壇社)を創刊する。応募俳句の選者の一人でもある。この誌の巻頭には芥川龍之介の「澄江堂雑記」という文章が載っていた。音楽家の樹人は要するに大俳人でもあったのである。

昭和2年(1927)1月末に、次女が「中山晋平おじさん、海野厚お兄さん、子供でした私にも、おじさんとお兄さんの別は分かりました。……、一寸こわそうな晋平おじさん、背の高い細身の厚兄さん、あなたを『樹人君、樹人君』と呼んで居りましたね。お二人に会わせてくれたことを感謝して居ります」と書き、その大前提として「全盛」の時代と定義表記した、その三菱の社宅を去るのである。要するに退職したのである。

何故にとも思うが、2月に「都新聞編集局」に入社することになる。仕事は俳壇の選者であった。大俳人性が買われた訳である。しかし3年8月には『昭和新曲選第五編・小田島樹人作曲』(京人社)が出ており、4年7月『昭和小学唱歌集第四編・小田島樹人作曲』(白眉出版社)も出ており、この頃白眉社の「唱歌教材」同人になり、昭和15年頃までこの同人の肩書は続いていたという。

紛れもない作曲家俳人であり、俳人作曲家だったのである。この昭和4年こそ長野県人の中山晋平作曲の「東京行進曲」が世に問われ、やがて山形県人佐藤千夜子の歌声で25万枚のレコードが売れる(『図説山形県史』)という年なのである。

昭和6年(1931)5月には田口松圃作詞「大曲小唄」の作曲をする。20年後本名謙蔵の田口大曲

図書館長は「音楽秋田」5号(昭和26年1月)で「大曲小唄作曲の頃」と題し、「大曲小唄を私に依頼した大曲の花柳界では作詞作曲それから振付も秋田人にしてくれという注文で、私はその頃県人の作曲家につき合が無かったので、都新聞にいる一魁時代からの友人-若松(謙次郎)君にお頼みした。すると若松君からは、『それは丁度この社に小田島樹人氏がいるから、おたのみしてみよう』という事になり、小田島先生の御快諾を得た」こと、「そしてそれをその頃でいう新舞踊界に乗出したばかりの花形であった五条珠実(その頃は花柳)さんに振付けを頼んでありましたので、先生はその作曲を携えて、珠実さんと幾度びも往復しては、しっくりしたものにされたのである。出来上ると小田島先生と珠実さんがわざわざ東京から大曲に来られて、芸者衆にけいこをつけて下さいました」と述べている。樹人の秋田に対する親愛の情が示されているようである。

この年は他に「花輪小唄」を、また翌年は「鹿角小唄」を、さらに10年(1935)には「湯瀬小唄」を作曲しているし、5年(1930)以前に「本荘小唄」(藤蔭清枝振付)の作曲もしている。

小唄類だけではなく、本領の作品でも7年3月「僕の弟」(『新訂尋常小学唱歌第一学年用』)という作詞作曲と考えられる曲を発表している。弟とは「僕の弟五郎ちゃん」とうたわれる明治24年生まれの実弟で青山学院を卒業し、大正5年5月に24歳の若さで亡くなった人だとされている。肉親を想う佳曲なのであろう。

昭和8年(1933)1月29日綾野夫人に先立たれた。次女京子氏の「絆」には「幸せな家庭に最大の不幸が訪れました。それは母の死、東京市一帯に感冒が大流行、洗濯中の母が『寒くて寒くて』と床に就き…略…一週間の病床で…略…逝ってしまいました。仕事を休み看護専一の若き日のあなたのこと鮮明に覚えてます。…略…あなたは大量の涙を流し『これから君達のことどうしよう』と泣きました。私達も声をあげて泣きました。悲しい悲しい、辛い辛い思い出です。その日から困る家事万端、花輪から婆やさんが上京しました。私達が一番迷いましたのは言葉でしたが、いつしか

心が通じ合い、数年間お世話になりました。婆やさん、なつかしいなつかしい呼び名です」と記述されている。当然この身辺不如意は、家族にも心配事であり、弟阿部六郎が動くことになる。

有能な父由義は早くも大正2年即ち樹人が音楽学校卒業の前に花輪町長に迎えられて郷里に戻っていた。大正9年に逝去してはいたが、小田島家の地元での立場は復元していたことになる。

第六郎は昭和11年段階で、同3年創立の花輪高等女学校教頭の任に在って、兄を自校の音楽・国語の教員になるように誘い、兄も受けて講師として赴任した。そして同校地理歴史の宮下トシ教諭との結婚に進むことになる。教頭も後援したのであろう。結婚したのは昭和18年1月18日とある。

しかし『小田島樹人先生を偲んで』の10頁には昭和12年に専攻科生だった戸沢（旧姓安保）八重子の「樹人先生が作法室の方から私共の教室をのぞき『安保一寸図書館において』と言われて行って見たら『僕結婚すればおかしいか？』とまじめな顔で問われ、咄嗟のこととて私は惑い何とお答えしたか記憶にないがびっくりしたことがありました。…略…先生は随分思慮なさったのだろうと思います。間もなく宮下先生とご結婚なされました」という回顧文が載っている。

昭和15年(1940) 県立秋田中学校に転勤する。「教諭昇格を拒み、薄給無恩給の一講師のままであった。驚くべき趣味人、博覧強記、奔放、無頼、無頓着、無欲、寡黙、金銭無感覚、秘めた反骨と、人によってさまざまの性格が指摘されるだろう。

努力型でなく、才人型であった。語学力も舌を巻くほどで、英独仏にわたり、達筆な横文字の板書である」と、昭和19年に秋田中学に入って授業を受けた井上隆明氏の名文が表現している教師像であった。榎山に居住していた。戦時体制の外で生きたとも評されている。

昭和24年(1949) 7月「秋田学生音楽連盟」を結成したことを述べる太田寿男「樹人先生と私」では、「授業に出るや、天衣無縫、軽妙洒脱な人柄と、話術の虜になり、一も二もなく音楽部に入った」「秋田音楽同好会が活動を始めたのは昭和23年のことだ」と、同好会が連盟に進んだことを

示しているように、戦後においても人気抜群の先生で、夜学生の授業にも熱心であったという。

前引の「絆」で「晩年に於けるあなたとトシさんの大ロマンスは知る人の心をゆさぶりました。私に、一言も話さなかったあなた、それでよかったのです。…略…主人は『あれでよかったんだ。お父さんの生甲斐、第一に経済面の協力、あの人ならでは…』と、同感です」と息女が理解を示したトシ夫人は、新潟県加治川村生まれで父は軍医であり、本人は東京女子高等師範学校出身の教育者であった。

昭和27年(1952) 中山晋平が急病死した際に「晋平のバカが何故死んだ」と涙を流した2年後の29年11月、脳溢血で倒れ言語障害の身になり教壇を去った。

長男輝夫は4歳であった。長男の「父を想う」には「父の思い出のほとんどを占めているのは、ベッドに横たわり、右半身が不自由で言葉を話すこともできない姿です」とある。

その中で来客を欲び、『児童百科辞典』を左手だけで巧みに読み、晋平作曲「砂山」を「やわらかな声で歌ってくれたのです。このまま病気が直ってしまうのではないかと思えるくらいに健康な歌声でした」と記す音楽の思い出も残した。

昭和34年(1959) 10月11日、11歳の長男を遺し逝去した。享年75歳。夫人は盛岡の「五葉会」への便で「主人は八十才以上生きると常に申して居りましたのに」と書き、九月着工で未完成だった新築自宅が出来たので「小学校五年生の長男と私の友人と三人で暮に今の家に引越して参りました」と報告している。